

研究ノート

大学入学前における外国人留学生の日本語表現力の傾向と課題 ー学部で早期合格した外国人留学生への入学前教育の結果を手掛かりとしてー

下岡 邦子

キーワード：外国人留学生の減少、入学前教育、形の軽視、気づきの機会、修正力

1. 「大学」と「外国人留学生」をとりまく状況

2020年3月から続くコロナパンデミックにより、国内の教育機関は甚大な影響を受け、様々な対応を求められてきた。その中でも、特に大きな影響を受けたのは、留学生教育に携わる教育機関であろう。

右のグラフは、日本国内の教育機関に在籍する外国人留学生数の過去5年間の推移を示したものである^[1]。このグラフからも明らかのように、2019年には31万2214人いた外国人留学生は、2020年には27万9597人、2021年には24万2444人と、減少の一途をたどっている^[2]。さらに、外国人留学生の在籍者数を教育機関別に見てみると、特に著しい減少を見せているのが、日本語学校などの日本語教育機関（凡例⑦）である。日本語教育機関の在籍者数を見てみると、2019年には8万3811人いた外国人留学生が、2021年にはその半数以下の4万567人にまで減少している。これは、新型コロナウイルス感染症拡大防止の水際対策として、日本政府が外国人の新規入国を厳しく、そして長期間におよんで制限したことによるものだ。日本語教育機関の場合、外国人留学生の在籍期間は6カ月間から最長で2年間とされる。このことから、日本語学校などの日本語教育機関では、毎学期多くの修了生が日本語教育機関での学修を終え、それと同時に、多くの新入生が日本語教育機関に入学するという「循環型運営」が一般的な運営スタイルとなっている。だが、コロナ禍により日本政府が外国人の新規入国を止めたこと

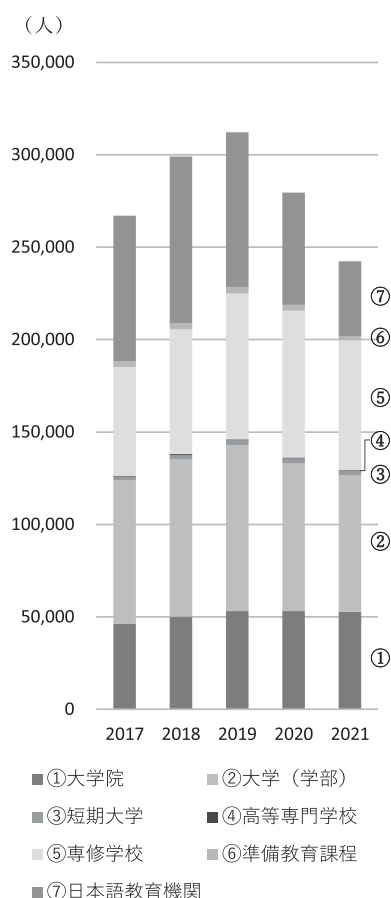


図1 外国人留学生の国内教育機関在籍者数推移

（独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査結果」を元に作成）

で、日本語教育機関における入学者もゼロになってしまった。つまり、これまで続けてきた循環型運営のうち、入口の部分が完全に閉ざされた状態となったのだ。そしてその結果、多くの日本語教育機関が経営に行き詰まるという事態を招いている^[3]。

日本語教育機関における外国人留学生の減少は、大学（学部）にも少なからず影響を及ぼす。なぜなら、日本の大学への進学を希望する外国人留学生の多くが、まずは日本語教育機関へ入学し、そこで大学進学のための準備を進めるからだ。したがって、日本語教育機関の外国人留学生数が減少することは、大学（学部）への進学を希望する外国人留学生の絶対数が減少することを意味する。実際、図1のグラフを見てもわかるように、大学（学部）（凡例②）の外国人留学生の在籍者数は、日本語教育機関のそれと比例する形で増減しており、2020年以降は、大学（学部）においても外国人留学生の在籍者数は減少しつづけている。

このように、2020年以降、大学や外国人留学生をとりまく状況は急激に変化している。そして、このような急激な変化の中で実施される大学教育、あるいは留学生教育において、より重要となってくるのが、迅速かつ正確な「学生把握」であるといえる。

コロナパンデミックという未曾有の事態によって、外国人留学生は様々な困難を強いられてきたことが推察される。例えば、日本国内への入国が予定よりも大幅に遅れ、想定していたほどに進学準備が進められなかった外国人留学生もいるだろう。また、日本語教育の多くが遠隔授業という形で実施されたことにより、日本語での直接的なコミュニケーションに不安を抱えた外国人留学生の存在も想定される。つまり、コロナ禍において、日本の大学（学部）へ進学する外国人留学生が抱える課題は、これまで以上に多様化、複雑化しているといえる。そして、このような多様化、複雑化した課題に対処する一つの方策として、本稿では入学前教育を活用した「学生把握」を提示したい。

入学前教育の有用性については下岡（2022）で述べた通りだが、本稿では、その中でも「学生把握」に着目する。具体的には、新入生がどのような課題を抱え大学へ進学したのかを、入学前教育で実施した小論文課題の内容から読み取れないか検討したい。

本稿で分析対象とする小論文課題は、神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コース（以下「GC 学部日本語コース」という。）に早期合格した外国人留学生（以下「入学者」という。）が入学前教育の一環として作成、提出したものである。今回対象となる入学者の入学年度は2021年度と2022年度である。つまり、彼らはコロナパンデミックが起きた2020年前後に、日本の大学への進学準備を開始した外国人留学生だといえる。よって、彼らが作成、提出した小論文課題の内容を分析することで、コロナ禍が入学者にどのような影響を与えたか（あるいは、与えなかったか）を確認することも可能となる。

以上のことから、本稿では、GC 学部日本語コースが2021年度と2022年度の入学者を対象に実施した入学前教育の小論文課題を分析対象とし、そこから、GC 学部日本語コース入学者にどのような傾向や課題が見られるのかを考察する。

2. (GC 学部日本語コース) 入学前教育実施内容

2.1. 入学前教育の概要

GC 学部日本語コースの入学前教育では、株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」を採択し、77 ある教材の中から「表現力基礎」という教材を選定、使用している^[4]。実施対象は前半入試合格者に限り、期間は1月下旬から3月下旬までの2ヵ月間である。株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」は、映像教材（1回90分の講座）の配付を基本とし、入学者はその映像教材を受け取り視聴する。さらに、GC 学部日本語コースが使用している「表現力基礎」では、映像教材（全10講）に加え、4回の小論文課題がある。入学者は映像教材を視聴した後、小論文課題に取り組み、株式会社ナガセに郵送で提出する。そして、提出された小論文課題は株式会社ナガセの添削者によって添削、評価され、入学者に返送される。

本稿では、この小論文課題を分析対象とし、そこからGC 学部日本語コース入学者の傾向と課題を考察する。

2.2. 小論文課題の内容と到達目標

「表現力基礎」で課される4つの小論文課題について、その内容（題目）と想定される到達目標をまとめると表1のようになる。これらの小論文課題は、それぞれ文字数が400字以上と指定されており、提出用紙（原稿用紙）では850字まで書けるようになっている。

4つの小論文課題は、それぞれ異なった視点で到達目標を設定している。まず、1回目の小論文課題では「自分の好きな動作」という身近な内容を取り上げ、小論文作成者に対して「なぜその動作が好きなのか」ということを自分の体験を通して説明するよう求めている。次に、2回目の小論文課題では『おおきな木』という作品を教材として取り上げ、その作品に対する感想を述べるよう指示している。ただし、2回目の小論文課題では、単に感想を述べるだけでなく、立場が変化することによって現在の感想がどのように変化するかも考えるよう求めている。こうすることで、単なる「感想文」ではなく、小論文作成者に「異なった立場による感想」を想定することを促している。また、3回目の小論文課題では新聞記事を教材として取り上げ、主観的な感想ではなく、客観的な事実から導き出される意見を述べるよう指示し、2回目までの小論文課題との違いを鮮明にしている。そして、4回目の小論文課題では「学ぶとは何か」という普遍的な問いを提示し、その問いに対して、主観的な視点と客観的な視点の両面から説明することを求めている。このように、4つの小論文課題には、それぞれ異なった視点で到達目標が設定されている。また、2回目と3回目に関しては、小論文を作成するにあたり、教材の読解が必須となっている。このことから、2回目と3回目の小論文課題に関しては、「提示された教材を正しく読み、理解する」ことが、小論文課題の出来を大きく左右するといえる。

表 1 小論文課題の内容（題目）と到達目標

実施回	出題講	出題内容（題目）	到達目標
1 回目	第 2 講	「自分の好きな動作」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が好きな動作を具体的に一つ挙げ、その理由を説明することができる ・その動作にまつわるエピソード（経験・体験）を説明することができる ・その動作が自分にどのような影響を与えたか、今度どのようにしたいかを考え、述べることができる
2 回目	第 4 講	「おおきな木」を読んで	<ul style="list-style-type: none"> ・「おおきな木」を読んでどのように感じたか、自分の気持ちを説明することができる ・自分の立場が変化する（例：子どもから親へと立場が変化する）ことで、物語の捉え方（感想）がどのように変化するかを考え、説明することができる
3 回目	第 6 講	「携帯電話（メール）」について	<ul style="list-style-type: none"> ・映像教材（およびテキスト）で示された新聞記事（5 つ）を踏まえ、携帯電話（メール）の利点や欠点を説明することができる ・携帯電話（メール）にまつわるエピソード（経験・体験）を説明し、自分に与える影響や問題点を説明することができる ・携帯電話（メール）の使用について、今後の展望や自身の行動を考え、述べることができる
4 回目	第 8 講	「学ぶとは何か」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にとっての「学び」とは何か、説明することができる ・自分がこれまでどのようなことを学んできたかを説明することができる ・大学でどのようなことを学びたいかを、その理由とともに説明することができる

それでは次に、GC 学部日本語コース入学者の小論文課題について、具体的にその内容を見ていく。

3. 小論文分析

3.1. 分析対象

分析対象とする小論文課題は、GC 学部日本語コースの 2021 年度入学者と 2022 年度入学者が提出した 66 本の小論文課題のうち、評価対象外のものを除いた 58 本の小論文課題である^[5]。

・分析対象：小論文課題 58 本

・入学者内訳：[2021 年度] 中国人 6 名、ベトナム人 2 名、インドネシア人 2 名、計 10 名
 [2022 年度] 中国人 4 名、ベトナム人 1 名、計 5 名^[6]

3.2. 成績評価

先述の通り、入学者が提出した小論文課題は株式会社ナガセの添削者によって ABCD の 4 段階で評価され、入学者に返送される。この 4 段階評価の基準は以下の通りである。

[A] 論理的に説明できている。

[B] 概ね説明できているが、少し説明に不足がある（[A] には一歩及ばない）。

[C] 論点がずれている。

[D] 小論文に不備が見られる（指定した字数の 9 割に達していない、など）。

そして、分析対象とする 58 本の小論文課題をこの 4 段階評価で示すと、[A] 5%、[B] 45%、[C] 50%、[D] 0% となる^[7]。つまり、全体の 95% が B 評価と C 評価で占められ、C 評価については、全体の 5 割に達しているということだ。これは、GC 学部日本語コース入学者が提出した小論文課題のうち、その半分以上が「論点がずれている」と評価されたことを意味する。そこで、その要因を探るため、小論文課題の評価を実施回別に見てみた。それが図 2 のグラフである。このグラフを見ると、C 評価は 1 回目と 2 回目の小論文課題に集中しており、3 回目以降は B 評価の割合が高くなっている。つまり、全 58 本の半数を占める C 評価の多くが、前半の小論文課題で付けられたものであり、3 回目、4 回目と回を重ねるにしたがって、C 評価の割合は減少しているということだ。ではなぜ、このような評価分布になったのだろうか。その理由として、次の 2 つの可能性が考えられる。

- (1) 前半（1 回目と 2 回目）では、入学者は、課題の趣旨や到達目標を理解しないまま小論文を作成したが、添削者の添削内容やコメントを確認することで、3 回目以降は、「何を書けばいいのか」「どのように書けばいいのか」ということを理解したうえで小論文の作成に取り組んだ。
- (2) 「自分の好きな動作」（1 回目）や「『おおきな木』を読んで」（2 回目）という内容（題目）よりも、「携帯電話（メール）」について」（3 回目）や「学ぶとは何か」（4 回目）

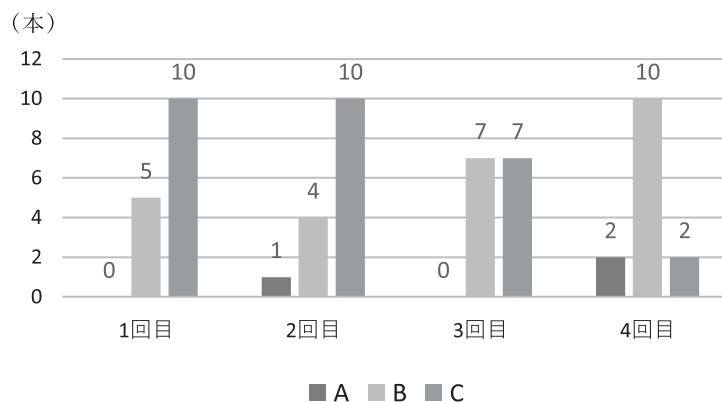


図 2 小論文課題の実施回別評価

という内容（題目）のほうで、入学者にとって身近なもので、取り組みやすかった。

上記2つの可能性のうち、どちらがより有効に作用したのか（あるいは（1）（2）のどちらでもなく、第3の可能性があるのか）については、今回の結果だけでは明確なことはいえない。だが、少なくとも1つの可能性として、「入学者が指摘を受け、自律的に問題点を修正することができた」ということが想定できることは、ここで述べておきたい。

3.3. 内容分析

小論文課題の内容分析にあたり、分析対象とした58本の小論文課題を次の5項目で評価した。各項目には、それぞれ複数の下位項目があり、1つの小論文課題の中に同じ下位項目に該当する箇所が2つ以上ある場合は「該当あり」として扱った。ここでは、以下の評価項目のうち、小論文課題全体の40%以上が該当した下位項目を挙げ、具体的にどのような特徴が見られるかを述べる。

表2 小論文課題の評価項目

項目（下位項目数）	下位項目【一部】
1) 文字・表記（4）	句読点使用の不備、漢字表記の間違い、仮名表記の間違い など
2) 語彙・文法（18）	語彙使用の間違い、助詞使用の間違い、動詞活用の不備 など
3) 文体（2）	書き言葉の不使用、文体の混合
4) 論理的記述（13）	意見表明の不備、根拠明記の不備、具体的説明の不備 など
5) その他（10）	原稿用紙の使用に関する不備、添削者の指摘に対する修正なし、テーマ理解の不足 など

1) 文字・表記

① 句読点使用の不備（該当率：50%）

句読点の使用に関する間違いは、特に、句点と読点の使い分けに関する間違いとして多く見られた。日本語では、文の途中では読点（、）を使用し、文の最後では句点（。）を使用するが、入学者の多くが、明らかに文が終わっている場合でも読点を使用しているなど、その使い分けに関する認識が曖昧である点が確認できた。

② 漢字表記の間違い（該当率：43%）

漢字表記の間違いについては、一般的に非漢字圏出身の外国人留学生に多く見られると思われるが、実際には、中国出身の外国人留学生にも漢字表記の間違いが頻繁に見られる。そして、その間違いの多くが、中国語で使用する漢字をそのまま日本語でも使用してしまうというものである。このような間違いの根本には、日本語の漢字に対する認識の低さがある。つまり、彼らは「漢字は一つである」と思い込み、日本語の漢字に対する認識が不足

している場合が多く見られるのだ。そして、そのような傾向は、今回の小論文課題においても確認することができた。

2) 語彙・文法

① 助詞使用の間違い（該当率：52％）

文法の間違いには様々なものが見られたが、中でも特に多かったのが、助詞の使用に関する間違いである。特に、格助詞などの、文を構成する基本的な助詞の使用に多くの間違いが見られた。これは、入学者の多くが、基本的な助詞に対する理解が曖昧なまま日本語を使用していることを示唆している。助詞に対する曖昧な理解は、例えば、会話などの発話の場面ではそれほど大きな問題とはならないが、小論文のように日本語を記述する場合には、その問題が顕在化する。今回の小論文課題においても、その半数以上が日本語の基本的な助詞の機能をきちんと理解しないまま、「なんとなく」使用しているという現状が確認できた。

② 従属節の形に関する間違い（該当率：43％）

助詞の使用と同様に多くの入学者に見られた間違いとして、従属節の形に関するものがある。特に、複数の文を1文にするテ形や連用中止形が正しく使用できておらず、「両親に理由を話します、両親にお金をもらいます、パソコンを買います。」のような、単文をただ並べただけの文を作成している入学者が多く見られた。

3) 文体

① 書き言葉の不使用（該当率：62％）

書き言葉と話し言葉の使い分けに関する間違いは、多くの外国人留学生に見られるものであり、今回の小論文課題でも6割以上で書き言葉の不使用が確認できた。特に、接続表現に関する間違いが多く、「だが」とするべきところを「でも」と記述したり、「～が」とするべきところを「～けど」と記述したりするなど、入学者の書き言葉の使用に対する認識の低さが確認できた。

4) 論理的記述

① 「自分への影響」や「今後の展望」に関する言及なし（該当率：86％）

今回の評価項目で最も該当率が高かったのが、「自分への影響」や「今後の展望」に関する言及がないというものである。表1の到達目標のところにもあるように、今回の小論文課題では、自分の意見（感想）と理由を述べるだけでなく、「テーマについて、自分はどのような影響を受けたか（受けているか）」や「テーマに対して、今度どのように行動したいか」なども説明するよう指示されている。しかし実際には、多くの入学者はそこまで記述することができておらず、「意見と根拠」の表明のみに止まっていた。

② 具体的説明の不備（該当率：83％）

4) の①の次に該当率が高かったのが、具体的説明の不備である。特に前半（1回目と2回目）の小論文課題で多くの不備が見られた。これは、小論文を作成するにあたり、入学者の多くが「具体的な説明とはどのようなものか」ということを理解しないまま作成したことが原因ではないかと推察される（実際、1回目や2回目で具体的説明を記述しなかった入学者が、3回目以降の小論文課題では具体的説明に言及している、という事例もあった）。とはいえ、3回目以降の小論文課題においても、具体的説明に全く言及しない、あるいは、言及している場合も、その内容に不十分な点があるなど、問題点を残したままの入学者も一定数いた。これらの結果から、具体的説明という評価項目が、表記や文法の間違いとは異なり、紙面での指摘だけで容易に修正できるものではないということが改めて確認できた。

③ 「意見と根拠」の形式の不使用（該当率：66％）

今回の小論文課題では、入学者の多くが「意見と根拠」を述べることができていた。ただし、適切な形式を使用して「意見と根拠」が述べられていた入学者は少なく、多くの入学者は、状況説明の中で自身の意見や、それを支える根拠（らしきこと）を説明していた。このような、正しい形式を適切に使用せず、他の文に紛れ込ませるように自身の意見や根拠（理由）を述べている小論文は、読み手にとって理解しにくいものであるが、今回の小論文課題においても、形式の不使用が原因の「不明瞭な内容の小論文」が多く見られた。

④ 論理展開の不備（該当率：48％）

文章全体の構成に関しても、形式を意識していないものが多く見られた。特に、「問題提起」や「まとめ」が書かれていない小論文課題が多く、1文目から、何の前置きもなく唐突に「意見と理由」が書かれている小論文課題も少なくなかった。このことから、半数近い入学者は、語彙や文型の形のみならず、文章全体の形（構成）についても、その重要性に対する認識が低いことがわかった。

5) その他

① 原稿用紙の使用に関する不備（該当率：66％）

今回の小論文課題の提出用紙は、原稿用紙形式となっている。また、4つの小論文課題はすべて縦書きで書くよう指定されている。原稿用紙の使い方については多くの日本語学校で指導されているが、その場合も横書きであることがほとんどだ。よって、今回の小論文課題ではじめて「原稿用紙に縦書きで書く」ということを経験した入学者も少なくなかっただろう。したがって、1回目と2回目の小論文課題では、ほぼすべての入学者が、縦書きでの原稿用紙の使い方を間違え、それぞれ思い思いのところに句読点や「」などの記号を書いていた。

② 添削者の指摘に対する修正なし（該当率：43％）

ただし、原稿用紙の使い方については、1回目の添削時から添削者がきちんとコメントを記して、その間違いを指摘している。それにも関わらず、2回目以降も同じ間違いを繰り返している入学者が4割以上いた。教師側からすれば、原稿用紙の使い方などは、一度指摘されればすぐに修正できるものであるように思うが、今回の小論文課題を見る限り、「何度同じ指摘を受けてもそれが修正できない」という性質を持つ入学者が一定数いることが確認できた。

3.4. GC 学部日本語コース入学者の傾向と課題

以上が GC 学部日本語コース入学者の小論文課題に対する具体的な内容分析である。では次に、それらの内容分析から、GC 学部日本語コース入学者の傾向としてどのような点が挙げられるか考察し、対策を検討する。

入学者が提出した小論文課題では、様々な間違いや不備が見られたが、それらに共通することとして、入学者の「形」に対する認識の低さが挙げられる。今回分析対象となった小論文課題を見てみると、その多くは、課題のテーマを理解し、400字以上で自分の意見や根拠が述べられていた。だがその一方で、それらの意見や根拠を「正しい形」で記述するという点に関しては、その認識が低い（あるいは皆無な）入学者が多い。例えば、漢字表記などは、いくらでも自分で調べて「正しい形」を修得することが可能である。しかし、自分の頭の中にある思い込みだけで記述し、仮にその間違いを添削者に指摘されても、その指摘を「素通り」してしまう入学者が多く見られる。それは原稿用紙の使い方についても同様で、添削者が複数回にわたって指摘を行っても、最後まで修正せずに小論文課題を終えた入学者が4割程度いた。このように、「容易に修正できそうなことも修正しない（あるいは、修正できない）」ということが、まずは、今回の小論文課題から読み取れる GC 学部日本語コース入学者の一つの傾向であるといえる。

ではなぜ、入学者は「正しい形」に修正できないのだろうか。そこには、「充実した内容を考える」ことばかりに重点を置き、「適切な形を使用して表現する」ことへの認識が著しく欠如している点が考えられる。つまり、「まずは内容、形は二の次」と考える入学者が多いのではないかと、ということである。

ただし、この「形の軽視」の傾向は、入学者のみに責任があるわけではない。教師側も含めた社会全体の風潮として、「充実した内容」や「斬新なアイデア」をより重視し、「それをどのような形式を用いて表現するか」という「形への認識」は、これまであまり重点が置かれてこなかったともいえる。

さらに、今回の入学者は、その多くがコロナパンデミックの最中に日本語を学び、進学準備を進めた学生たちである。2020年から2021年にかけて、多くの教育現場が様々な対応と制約を強いられ、学生にとっても教師にとっても、大変不幸な時期であった。よって、その

ような時期に進学準備を進めなければならなかった外国人留学生にとって、どれほど効果的な「気づきの機会」が提供されたかは、疑問が残るところである。

したがって、今回分析対象となった入学者が、少なからず形を軽視してしまうのも致し方ない面がある。しかし、「正しい形」の使用なくしては、どれほど素晴らしいアイデアも言語化することができない。したがって、今後は、より効果的に「正しい形」の重要性を入学者に伝えていく必要があるといえる。

では、どのようにして、入学者に「正しい形」の重要性を伝えればいいのか。ここで重要となってくるのが、効果的な「気づきの機会」の設定である。

外国人留学生を含む多くの学生たちは、潜在的な修正力を保持している。だが、その修正力は常に顕在化するわけではない。例えば、漢字表記や原稿用紙の使い方が修正できない入学者も、図2のグラフで示した通り、「根拠の提示」や「具体的説明」については一度の指摘で修正することができていた。これは、彼らの修正力が顕在化したからだ。ではなぜ、添削者が同じように重要だと思って指摘した漢字表記や原稿用紙の使い方に対しては入学者の修正力は顕在化しなかったのだろうか。それは、その指摘に対して入学者自身が「納得」していないからである。つまり、入学者自身が「重要な指摘だ」と理解し納得していない場合は、入学者の修正力は顕在化せず、添削者からの指摘を「素通り」してしまうのだ。したがって、教師は、学生に対して間違いをただ指摘するのではなく、学生が指摘に対して納得できるよう、その指摘を効果的に「演出」する必要がある。それが「気づきの機会」の設定である。

「気づきの機会」の設定については、アクティブラーニングや反転学習など、既に様々な方策によって実施されている。ここでは、どのような「気づきの機会」が効果的であるかを軽々に述べることはできないが、まずは、教師一人一人が効果的な「気づきの機会」を模索し、設定することが、今後の大学教育において重要であると考えられる。

4. 入学前教育の活用

以上、GC 学部日本語コース入学者の傾向と課題を、入学前教育での小論文課題の内容分析を通して考察した。

今回分析対象となった2021年度入学者と2022年度入学者は、まさにコロナパンデミックの最中に進学準備を進め、大学に進学した外国人留学生である。そのような特殊な状況下で大学に進学した彼らの特質を把握することは、現在、そして今後の外国人留学生の動向を理解するうえで、大変重要なことだといえる。さらに、今回は2021年度と2022年度の2年度分の小論文課題を分析対象としたが、このような入学前教育を活用した調査、分析は継続して行われることが望ましい。そして、そのような継続的調査・分析を通して、コロナ禍、さらにはコロナ後のGC 学部日本語コース入学者の特性がどのように変化していくのかを的確に把握し、さらに充実したカリキュラム構成を模索することが、今後より一層求められる

といえる。

〔注〕

- 1 日本学生支援機構が毎年3月に公表している「外国人留学生在籍状況調査結果」では前年5月1日時点での国内の教育機関に在籍する外国人留学生の人数が示されている。
- 2 2021年の教育機関在籍者数のうち、約2万人は海外から遠隔で授業を受けていたとされる。したがって、実際に日本国内で学ぶ外国人留学生の数はさらに少なかったといえる。
- 3 日本語教育機関関係6団体の2022年3月の調査によると、アンケートに応じた日本語教育機関320校のうち、およそ4割が「現状の入国規制が続くと、6カ月以内に経営が破綻する」と回答したことが報告されている。
- 4 GC学部日本語コースが実施する入学前教育の詳細については、下岡（2022）を参照されたい。
- 5 提出された小論文課題66本のうち、8本（提出者2名）の小論文課題については、その内容に剽窃の疑いが見られることから、今回は分析対象から除外した。なお、「課題の作成において剽窃行為を犯す」ということも、入学者の学習姿勢を考えるうえで重要な情報であるといえる。この点については、別の機会でも改めて考察したい。
- 6 2022年度の入学者5名のうち、1名は、1回目と2回目の小論文課題のみを提出し、3回目と4回目の小論文課題は未提出であった。なお、株式会社ナガセからの報告によると、入学者本人とのやり取りが円滑に進まず、実施期間の中盤以降は「激励電話」などの対応を止めたとのことだった。
- 7 B評価とC評価には、B⁺、B⁻およびC⁺、C⁻も含まれる。

〔参考文献〕

- 下岡邦子（2022）「外国人留学生に対する入学前教育の意義と課題」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第7号、pp.81-91
- 株式会社ナガセ／東進ハイスクール（2021）『2021年神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部入学前準備教育結果報告書』
- 株式会社ナガセ／東進ハイスクール（2022）『2022年神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部入学前準備教育結果報告書』
- 独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査結果（平成29年～令和3年）」
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/index.html>（2022年9月29日閲覧）
- 日本語教育機関関係6団体（2022）「日本語教育機関の経営実態調査 アンケート結果概要」日本語教育機関団体連絡協議会 HP <https://jls6dantai.wixsite.com/website>（2022年9月29日閲覧）
- 文部科学省（2022）「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性（案）」第168回中央教育審議会大学分科会資料

